

小児科だより vol.50

顕在化しにくい発達障害について

2020.10.1 発行

こんにちは。だんだん日が短くなり、朝夕は涼しく感じるようになってまいりました。現在、小児科外来では、アデノウイルス感染症などのお子さんが増えております。当科では、例年通り10月上旬からインフルエンザの予防接種を開始いたしますので、お気軽にご相談頂けますと幸いです。過去の小児科だより、『うちの子はインフルエンザのワクチンうった方が良いですか?』のタイトルで掲載しておりますので、そちらも参考にさせて頂けますと幸いです。



さて今月のテーマは、発達障害の中でも顕在化しにくい4つの発達障害について、その早期発見と支援などについてお話しさせていただきます。

発達障害は、脳機能の発達が関係する生まれつきの障害とされます。症状の現れ方は様々ですが、一般にコミュニケーションや対人関係をつくることを苦手とする特性を示します。自閉スペクトラム症（ASD）や注意欠如多動症（ADHD）は、社会性の困難さや多動・衝動性が目立つことで、幼児期からわかりやすい発達障害といえるでしょう。しかし、吃音・チックなどは、発達障害者支援法で発達障害と定義されているにも関わらず、その特性に早期から気づいて支援する方法が明確になっていない現状があります。

4つの顕在化しにくい発達障害、『チック』、『吃音』、『不器用』、『読み書き障害』（それぞれの詳細に関しては、今回は割愛します。）には、幼児期発症、自然軽快率が高い、ASDやADHDとの併存例が多いなどの共通点があります。就学前にこれらの子供たちをスクリーニングし、適切に支援することを目的として、2016年度から厚生労働省の研究班が立ち上がり、保護者・保育士・幼稚園教諭を対象にした質問紙の作成を行いました。その後、質問項目の選定や統合を行い、質問紙を使った全国調査などを経て、高い妥当性と信頼性を併せ持ったアセスメントツール CLASP（Check List of obscure disAbilitieS in Preschoolers）という名称の質問票が完成しました。

CLASPは、年長児を対象とした19項目の質問票で、毎日その子供を見ている方なら5分程度でチェックすることが出来るものです。発達障害に関して診断を確定することを目的としたものではなく、就学前から就学後にかけての支援につなげる目的で活用するものです。厚生労働省の科学研究成果データベースや発達障害情報・支援センターホームページの資料などにチェックリストの活用マニュアルが記載されております。興味を持たれた方は、平易な解説書なども出版されておりますので、小児科にご相談していただけますと幸いです。